

41. 平成元年～平成5年における鑄造修復ケースの失敗例について

平本 正樹, 荊木 裕司, 野田 晃宏
 川上 智史, 原口 克博, 宮田 武彦
 横内 厚雄, 大沼 修一, 尾立 達治
 長岡 央, 飯岡 淳子, 笹淵 博子
 松田 浩一

(歯科保存学第二)

歯学教育における臨床実習とは、歯科医学の知識、技術を臨床において実践することにより身につけるのみならず、歯科医療の担い手としての不可欠な態度、倫理感の確立、患者とのコミュニケーション技術を習得するための重要な場となると定義されている。

臨床実習において、実習生自身が実際の診療に最も大きく関与するのが相互実習と患者診療の部分担当であるが特に鑄造修復においてはこの製作物の良否が予後、治療日数に直接影響する。平成元年～平成5年（7～11期生）の実習ケースのうち、鑄造修復ケースについて実習に用いられている診療録を資料とし集計を行った。さらに今回は特に失敗例について、その時期、期間、原因等を検討したところいくつかの知見を得たので報告する。

1. 7期生から11期生までの相互実習における修復総ケース数は、7期生から9期生までは、年を追う毎にケース数は増大したが10期生からは減少した。
2. 7期生に再製作率が15.5%と高い割合を示したが、

8期生以降はほぼ横ばいの傾向を示した。

3. 隣接面を含む窩洞としてII級、MOD、4/5冠をまとめて考えると、単純窩洞に対しての複雑窩洞の相対的割合が増加した。
4. 総合的に見て再製作ケースは各窩洞の通常ケースの約2～3倍の日数がかかっているが、年を追うごとに再製作日数の短縮が認められた。
5. 再製作理由には、全体的に適合不良が最も多く、複雑窩洞で調整ミスが増加した。

以上の問題点の改善策として、まず、基礎実習において寒天アルジネート印象を導入する。そして技工においては各ステップにおけるチェック、指導を今まで以上に行わなければならないことが考えられる。

本検討を基にして今後の学生実習の向上に役立て、また、さらに今後も継続的に調査・報告を行って行きたいと考えている。